

平成24 年度愛知県がんセンター公開講座(第5回)
がん征圧月間・がん征圧講演会 =平成24年9月1日(土)開催= のご案内

< 講師からのメッセージ >

「悪性リンパ腫研究の最前線」

悪性リンパ腫は血液のがんの1つで、10万人あたり12人程度の頻度でおこるといわれており、この30年で約2倍から3倍に患者さんが増えています。悪性リンパ腫では染色体転座といわれる遺伝子異常がおこったり、原因ウイルス感染が最初のきっかけとなり、さらに複数の遺伝子異常が蓄積して発症すると考えられています。これらの遺伝子異常は診断や治療の標的遺伝子として重要な役割を担っています。講演では、これらの遺伝子異常による悪性リンパ腫の発症メカニズムについての研究も紹介したいと考えています。

研究所 遺伝子医療研究部 部長 瀬戸 加大

「血液がん(白血病・リンパ腫)に対する最新の治療」

血液がんには白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などといったさまざまな疾患があります。血液がんでは病態解明が進み、その原因が分子レベルで明らかになってきています。治療法も新薬の開発や造血細胞移植療法などが進み、病状にあわせた治療によって治療成績が大きく向上しています。本講座ではとかく難しい印象を受けがちな血液がんに対する最新の治療法についてわかりやすく解説したいと思います。

中央病院 血液・細胞療法部長 兼 輸血部長 木下 朝博

「ナノメディシンによる難治がん研究の最前線」

ナノメディシンとは、ナノテクノロジーと医科学を融合した最新の医療のことで、がんの医療技術の開発に近い将来新たな解決をもたらすことが期待され、最近大きく注目されつつあります。「ナノテクノロジー」という超微粒子の操作技術は、これらが体内で動かすために好都合な小さな粒子であることから、患者さんのがんの組織に薬を送り込むドラッグデリバリーシステム(薬物輸送技術)の道具や、検査・診断への技術応用が考えられています。本講演では、今どのようなナノメディシンが難治がんの克服を目指した医療で進められているのかをわたしたちが現在進めているペプチド研究を含めて紹介します。

研究所 腫瘍病理学部 部長 近藤 英作

「最難治がんー膵がん診断・治療の最前線」

膵がんはこの30年、5年生存率の改善がほとんどみられず、最難治がんとして認識されています。しかし近年、高リスク群の設定、診断技術の進歩、手術後の抗がん剤投与(術後補助療法)や進行がん症例に対する新規抗がん剤の開発・承認など、膵がんの診断および治療は少しずつですが、しかし確実に進歩しています。今回は内科医の立場から、膵がんに対する最新の取り組みについて紹介します。

中央病院 消化器内科部 医長 水野 伸匡